

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02772

研究課題名（和文）日本文化理解教育の教育課程開発に関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical research on curriculum development for Japanese cultural understanding education

研究代表者

永添 祥多（Nagasoe, Shota）

近畿大学・産業理工学部・教授

研究者番号：90461483

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：当初、小中学校・高等学校での日本文化理解教育の教育課程開発を対象を絞って現地調査を実施する予定であったが、新型コロナウイルスの全国的蔓延により現地調査が不可能となった。このため、急遽、サブタイトルとして、「大学教養科目の日本史の教育課程開発」を掲げ、研究内容を大幅に変更することになった。日本史科目を我が国の伝統文化教育の一貫して捉え、日本史の通史ではなく、特に日本文化の発展の上からも重要な徳川時代に焦点を絞った。その結果が2023年4月に刊行した『徳川将軍の治世と人物像』（風間書房）である。その中で、徳川15代の将軍の治世の概要・歴史的意義と並んで人物像も並行叙述し、新しい歴史学習の教育課程を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

当初、小中学校・高等学校での日本文化理解教育の教育課程開発を対象を絞って現地調査を実施する予定であったが、新型コロナウイルスの全国的蔓延により現地調査が不可能となった。このため、急遽、サブタイトルとして、「大学教養科目の日本史の教育課程開発」を掲げ、研究内容を大幅に変更することになった。日本史科目を我が国の伝統文化教育の一貫して捉え、日本史の通史ではなく、特に日本文化の発展の上からも重要な徳川時代に焦点を絞った。その結果が2023年4月に刊行した『徳川将軍の治世と人物像』（風間書房）である。その中で、徳川15代の将軍の治世の概要・歴史的意義と並んで人物像も並行叙述し、新しい歴史学習の教育課程を示した。

研究成果の概要（英文）：Initially, the plan was to conduct a field survey focused on developing a curriculum for Japanese cultural understanding education in elementary, junior high, and high schools, but the nationwide spread of the new coronavirus made the field survey impossible. For this reason, the subtitle was suddenly changed to "Curriculum Development of Japanese History as a University Liberal Arts Subject," and the content of the research was drastically changed. We view Japanese history subjects as an integral part of our country's traditional cultural education, and instead of focusing on the general history of Japan, we focus on the Tokugawa period, which is particularly important from the perspective of the development of Japanese culture. The result was "The Reign and Character of the Tokugawa Shogun" (Kazama Shobo), published in April 2023. In this work, he also described the personalities of the 15th Tokugawa shoguns, presenting a new curriculum for historical learning.

研究分野：近代日本教育史、日本文化理解教育

キーワード：日本文化理解教育 我が国の伝統や文化 大学の教養科目としての日本史 歴史教科書の叙述

1. 研究開始当初の背景

本研究は、現行及び次期の学習指導要領でも改訂のポイントの一つになっており、私がここ数年来取り組んでいる、日本文化理解教育（我が国の伝統や文化の価値を理解し、尊重するとともに、継承・発展させるための教育を指す、定義の詳細は拙著『高等学校の日本文化理解教育』風間書房、2009を参照）の研究の一環をなすものであり、単に子どもたちに自国文化を再認識させるにとどまらず、国際化やグローバル化の進展に伴って必須の能力である日本文化の発信力育成に必ずや寄与するものであると考える。

つまり、私の提唱する日本文化理解教育とは、単に自国文化に強い興味・関心を有する子どもたちを育成することだけが目的なのではなく、国際化社会やグローバル化社会を生き抜くために不可欠の発信力や提案力の育成にも資するところが大きいと確信するものである。

だが、我が国の伝統や文化に関する教育のカリキュラム論や指導方法論が確立されているとは言いがたい現状にあり、学問研究としては緒に就いたばかりである。これまでの先行研究は、各実践校の実践研究検討の段階にとどまり、伝統や文化に関する理論的研究は未だ本格的には着手されていない段階にある。このため、日本文化理解教育の学術性向上に資する研究の一環として、本研究を着想したのである。

特に、その教育課程については、各学校現場の思いつきや経験による実践研究が多く、系統的な教育課程開発の学問的手法が確立されているとはいえない現状にある。私が理事を務める和文化教育学会でも、早急に教育課程論や指導方法論の確立が求められており、学校現場からも単なる経験の積み重ねではなく、教育課程編成や指導法の学術的方法論の提示が求められているのである。

応募者は別紙研究活動欄にあるように、これまで多角的観点から考察を行ってきたが、今回はそれらの研究実績を基に、特に教育課程開発の学術的方法論に焦点を絞って研究を深化させることを目的としている。

特に、本研究の着想に至った学術的「問い」としては、日本文化理解教育が秘める可能性とは、何だろうかということである。即ち、教育課程を通して日本文化理解教育が学校現場に及ぼす可能性とは具体的にどのようなものであり、教育課程編成の視点によって教育効果も変化するのではないかと、また、学校経営にどのような変革をもたらすのかということである。

本研究は、日本文化理解教育の教育課程に対する科学的分析を行うことによって、類型ごとのモデル的教育課程を提示し（各教科・科目、特別活動、総合的な学習の時間の3領域内で類型ごとのモデル的教育課程の開発を試みる）、科学的授業実践の指針を示すことを目的としている。教育課程の類型とは、例えば、何を目標とするかによって、「知識理解型」、「生活態度・能力育成型」、「日本文化発信力育成型」（各々さらに細分化の予定）などが想定されるが、現段階は仮説段階であり、さらに増える可能性がある。このことによって、日本文化理解教育の研究を科学研究としてその学術性を高めるだけでなく、子どもたちに今後の国際化社会やグローバル化社会を生き抜く力を身につけさせる授業実践の推進に寄与することも意図している。

我が国の伝統や文化の教育に関する先行研究は多く存在してはいるが、その教育課程について科学的に考察するのは本研究が初めてであり、本研究の成果によって、日本文化理解教育研究の学術性が高まるとともに、多様な教育実践が展開していくことが期待されるのである。

2. 研究の目的

本研究では、日本文化理解教育の理論的根拠を構築するための基礎研究の第一歩として、まず、全国各地の先進的実践校の教育課程収集を行い（第一段階～教育課程収集段階）、次いで、収集した教育課程の分析・検討を行い（第二段階～教育課程分析・検討段階）、さらに教育課程の類型化を試みることによって（第三段階～教育課程の類型化段階）、最終的には教育課程のモデルを提示したい（第四段階～モデル教育課程開発段階）。これら一連の作業は、とりもなおさず、日本文化理解教育に関する研究が、科学研究として学術性を帯びるための大前提であり、今後の授業実践にも大きな影響を与えるものであると確信する。

当初の研究目的は上記のようなものであったが、コロナ禍であったため、研究目的及び内容を大幅に変更した。

小中学校や高校への十分な調査が行えないため、当該年度から伝統文化の対象を日本歴史に絞り、特に大学の一般教養教育としての日本史学習のカリキュラムの構築作業に研究内容を変更した。

従って、研究課題名のメインタイトルの「日本文化理解教育の教育課程開発に関する実証的研究」はそのまま、サブタイトルとして「大学の教養教育としての日本史の教育課程開発を中心として - 」を付与することにした。

これらの変更後の成果は、令和5年4月発刊の『徳川将軍の治世と人物像』（風間書房、260頁単著）として、公開した。この著作は、徳川歴代将軍の治世や歴史的意義、各人の人物像をわかりやすく図版を多用し、日本歴史に興味関心を持ってもらい、さらには、講義の受講生各人が発展的に自発的学習を促すよう工夫した内容構成を取っている。

教養教育としての日本史教育は、今後一層進展する国際化社会の中であって、非常に重要であると考え、特に理系の学生は高校時代に日本史学習を受けていない者も多いことから、教養教育としての日本史教育は不可欠と考える。自国の伝統文化や歴史に対する深い理解や愛着なくして、真の国際化人とはいえない。このため、日本史学習の面白さや奥深さ、日本人や日本という国家の特質を江戸時代の政治史を通して理解できるような内容構成を取っている。

その成果として、単著の『徳川将軍の治世と人物像』（風間書房、260頁）を刊行した。この書籍は大学の日本史概論用の教科書として執筆したものであり、実際に近畿大学や福岡工業大学の教科書として使用している（履修者約800名）。この教科書は大学の歴史教育のカリキュラム作成に新しい試みを行っている。第一に、各将軍の治世の概要・歴史的意義と並んで将軍の人物史としての観点から、将軍の生い立ち、父母・妻子・子ども・趣味・学問武道・死因などの私生活についても記しており、類書にはない内容構成を取っており、政治史と人物史の同時並行記述という、全く新しい歴史教科書の叙述スタイルを取っている。第二に、史実に立脚しながらも、物語性を重視しており、高等学校までの歴史教科書の叙述スタイルである史実の羅列ではなく、歴史的因果関係を意識して叙述している。第三に、大学の教科書という性格上、治世の概要に関しては、適宜、最新学説を紹介することによって、従来の江戸時代の書き換えが行われている学界の情勢を反映させている。第四に、歴史用語や人名は難読なものが多いため、すべての元号・人名・地名・歴史用語などにルビをつけ、さらに歴史用語については、用語の後の（ ）の中に具体的説明を入れており、歴史学習に対する興味を増すように努めている。このような全く新しい歴史教科書を作成することにより、我が国の伝統文化の一環である日本史学習のカリキュラム開発の具体例を示した次第である。

3. 研究の方法

『徳川将軍の治世と人物像（風間書房、2023）』は、大学の教養科目の「日本史」・「日本史概論」などの日本史科目の教科書として執筆し、大学の歴史教育の新しいカリキュラムの事例を示したものである。

日本史の中でも江戸時代を対象とし、特に、徳川歴代将軍の治世と人物像に焦点を当てている。初代家康に始まる15人の徳川将軍たちの治世、即ち、将軍在職期間の政治の内容については数多くの先行研究によって解明されているが、一人の人間としての人物像については、特定の将軍以外は十分に明らかにされているとはいいがたい。

そこで、先行研究に依拠するとともに、各種史料を基に、15人の将軍たちの治世の概要と歴史的意義、そして、人物像を簡潔に分かりやすく述べている。

本研究では、次のような特色を有している。

第一に、治世の概要と人物像の両面から歴代将軍について述べており、類書にない内容構成を取っていることである。単に治世の概要について述べるだけでなく、人物についても触れることによって、歴代将軍に対する関心がより一層高まると考えたからである。15人の人物史としての徳川将軍史の視点から叙述しているのである。

第二に、史実に立脚しながらも、物語性を意識して叙述していることである。高等学校までの歴史教科書の叙述スタイルである史実の羅列ではなく、歴史的因果関係、つまり、様々な歴史上の事実の原因と結果について明らかにすることによって、歴史学習の「おもしろさ」や「楽しさ」が読者に伝わると考えたからである。

第三に、大学の教科書という性格上、治世の概要に関しては、適宜、最新学説を紹介することによって、従来の江戸時代史の書き換えが行われている学界の現状についても紹介していることである。

第四に、歴史用語や人名な難読なものが多いため、すべての元号・人名・地名・歴史用語などにはルビを振っていることである。まず、文字が読めなくては歴史に対する興味も薄れてしまうとの配慮からである。

第五に、できるだけ多く、肖像画などの図版をカラーで収載したことである。視覚に訴えることによって興味が増すとともに、理解も深まると考えたからである。

4. 研究成果

当初、小中学校・高等学校での日本文化理解教育の教育課程開発を対象を絞って現地調査を実施する予定であったが、新型コロナウイルスの全国的蔓延により現地調査が不可能となった。このため、急遽、サブタイトルとして、「大学教養科目の日本史の教育課程開発」を掲げ、研究内容を大幅に変更することになった。日本史科目を我が国の伝統文化教育の一貫して捉え、日本史の通史ではなく、特に日本文化の発展の上からも重要な徳川時代に焦点を絞った。その結果が2023年4

月に刊行した『徳川将軍の治世と人物像』(風間書房)である。その中で、徳川 15 代の将軍の治世の概要・歴史的意義と並んで人物像も並行叙述し、新しい歴史学習の教育課程を示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 永添祥多	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 260
3. 書名 徳川将軍の治世と人物像	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------